

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ＞

口永良部島では、7月9日01時頃から古岳付近の浅いところで火山性地震が増加していると判断したため、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。しかし、観測された振動波形について精査を行った結果、古岳付近の浅いところで発生した火山性地震ではなく、現地調査の結果等でも異常は認められず、火山活動の高まりを示すものである可能性は低いと判断しました。

このため、本日（17日）15時30分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

【防災上の警戒事項等】

活火山であることから、新岳及び古岳の火口内では、火山灰等が噴出する可能性があります。また、新岳西側割れ目等の地熱域では、高温の噴気や火山ガス等に注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

口永良部島では、7月9日01時頃から03時頃にかけて、古岳付近の浅いところにおける火山性地震の増加とみられる現象が観測されました。この際に観測された振動波形について精査を行った結果、古岳付近の浅いところで発生した火山性地震ではなく、島の南側付近の浅いところが振動源と推定される現象と判断しました。

14日に海上から実施した現地調査では、新岳及び古岳の周辺や周辺海域の状況に特段の変化はありませんでした。

火山性地震の発生状況やその他の観測データに、特段の変化は認められていません。

これらのことから、火山活動の高まりを示すものである可能性は低いと判断し、本日（17日）15時30分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

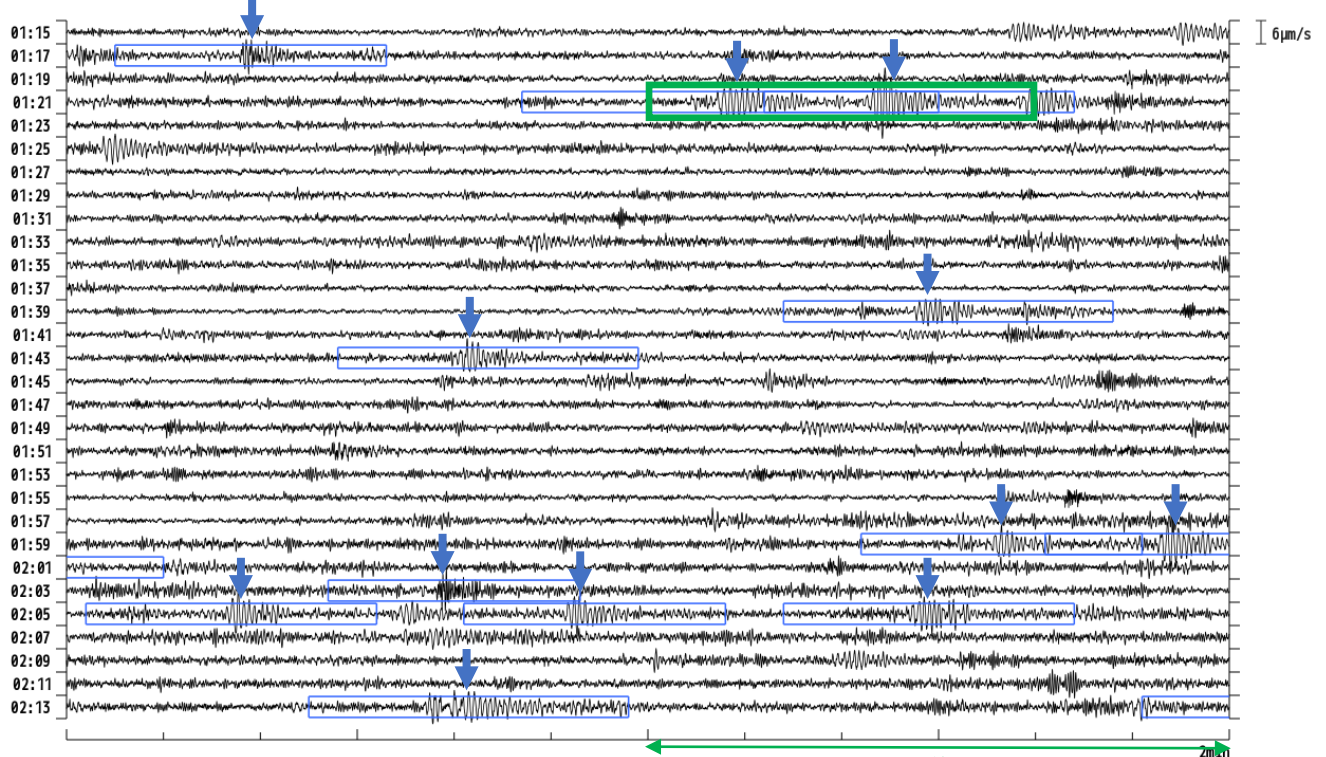
この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

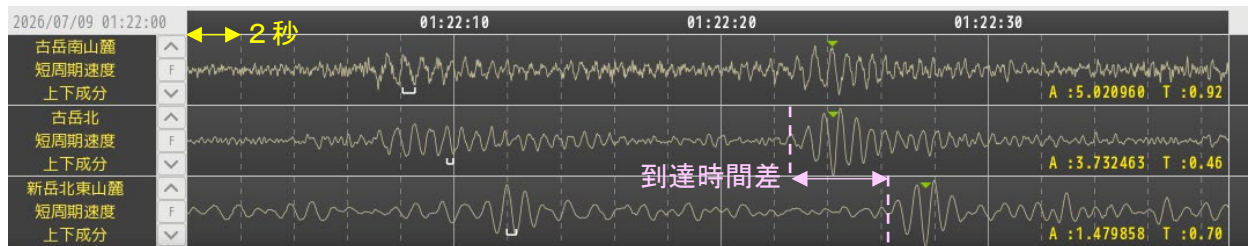
噴火警戒レベルの判定基準表については気象庁ホームページを御覧ください。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level_kijunn/keikailevelkijunn.html

① 地震計の観測記録（2026年7月9日01時15分～02時15分、古岳北観測点上下動成分）



② 上段緑枠内の振動波形



③ 火山性地震の波形例（2025年8月18日07時35分、古岳火口付近が震源）

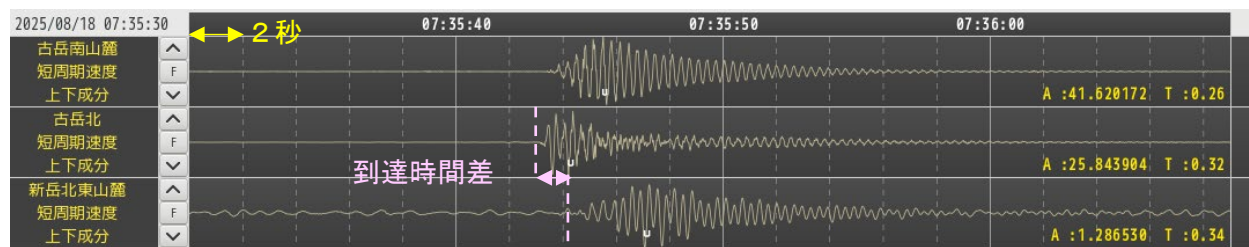


図1 口永良部島 7月9日01時頃に観測された振動波形の状況

上段：2026年7月9日01時15分～02時15分、古岳北観測点上下動成分、

中段：上段緑枠内の拡大図、

下段：2025年8月18日07時35分 火山性地震（古岳火口付近が震源）の波形

7月9日01時頃から03時頃にかけて、古岳付近の浅いところにおける火山性地震の増加とみられる現象（青矢印）が観測されました。この際に観測された振動波形について精査を行った結果、古岳付近の浅いところで発生した火山性地震ではなく、島の南側付近の浅いところが振動源と推定される現象と判断しました。

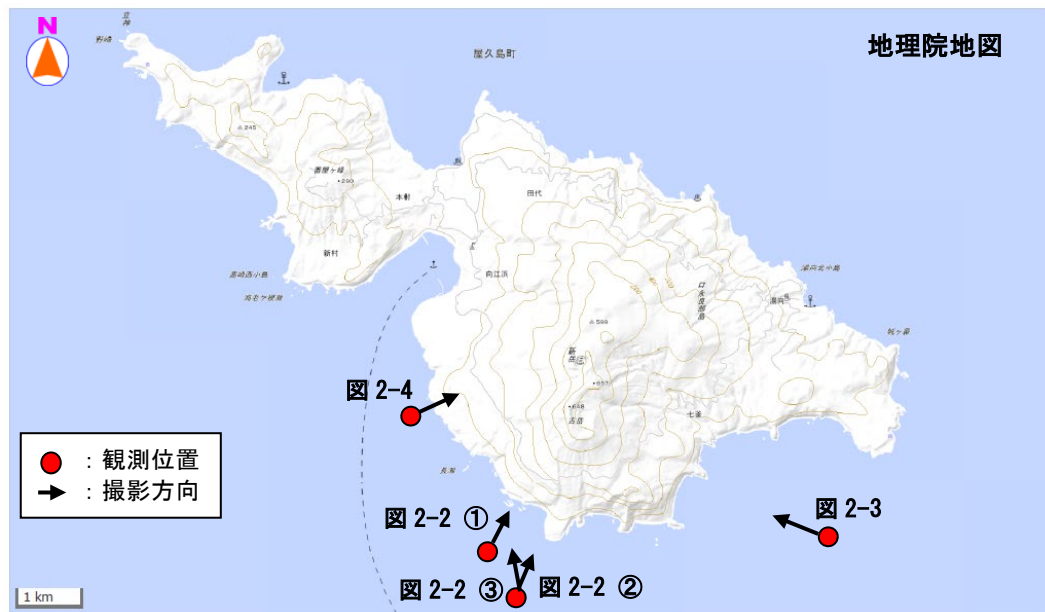


図2-1 口永良部島 観測位置及び撮影方向

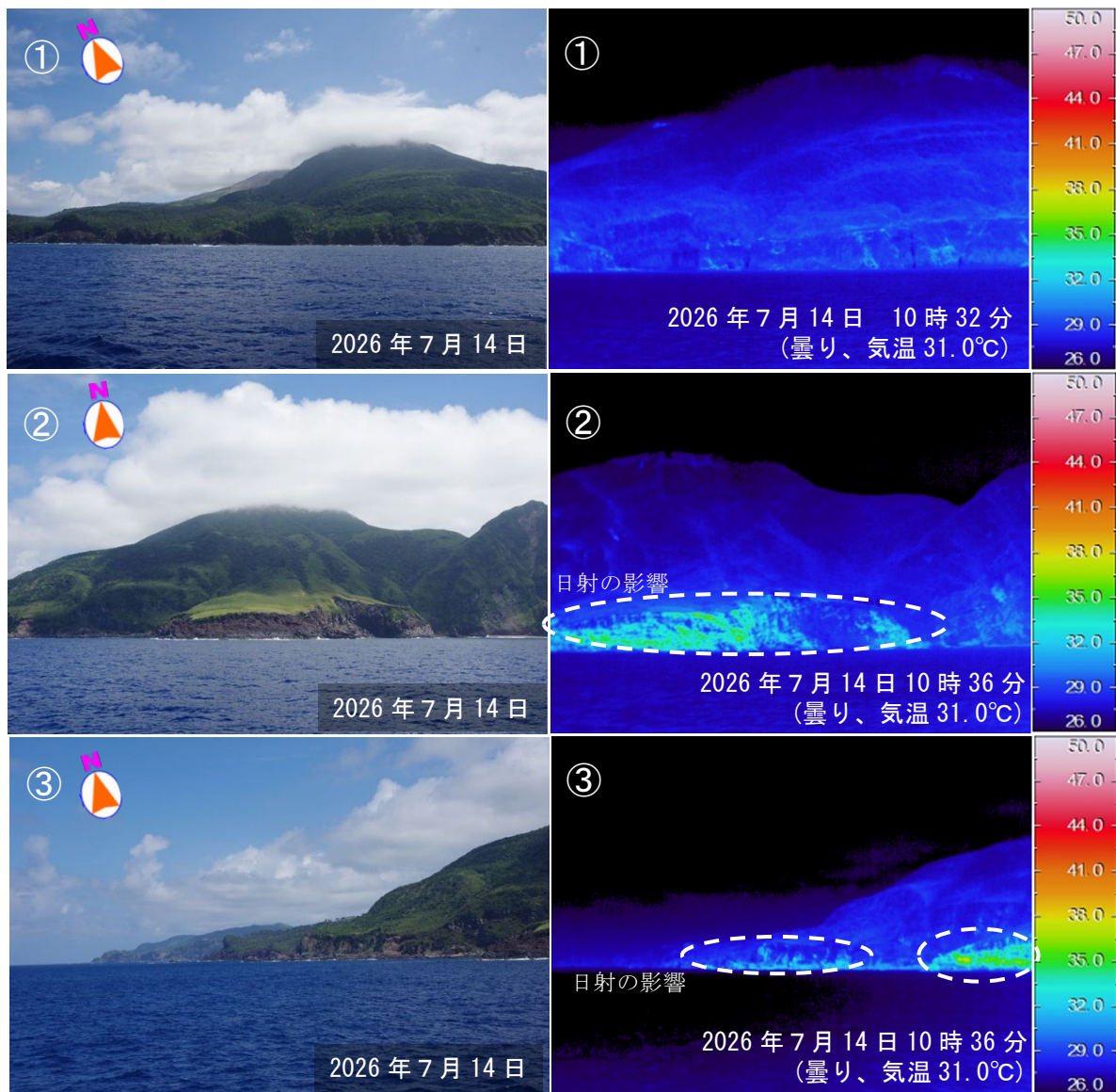


図2-2 口永良部島 古岳周辺の状況（南側海上から観測）

14日に海上で実施した現地調査では、古岳の山頂付近は雲のため確認できませんでした。古岳の周辺や周辺海域の状況に特段の変化はありませんでした。

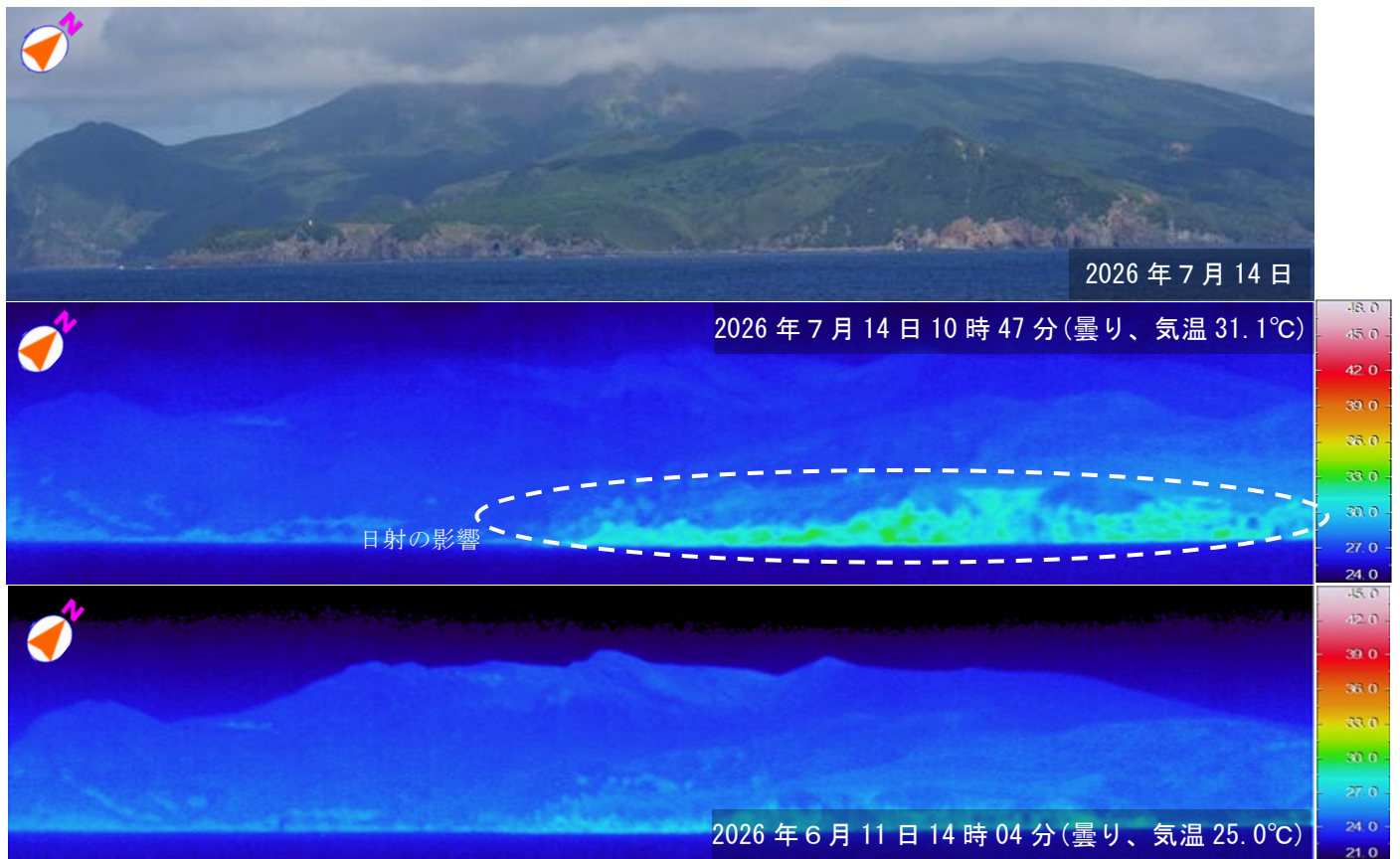


図2-3 口永良部島 古岳火口周辺の状況（南東側海上から観測）

14日に海上で実施した現地調査では、古岳の山頂付近は雲のため確認できませんでした。古岳の周辺や周辺海域の状況に特段の変化はありませんでした。

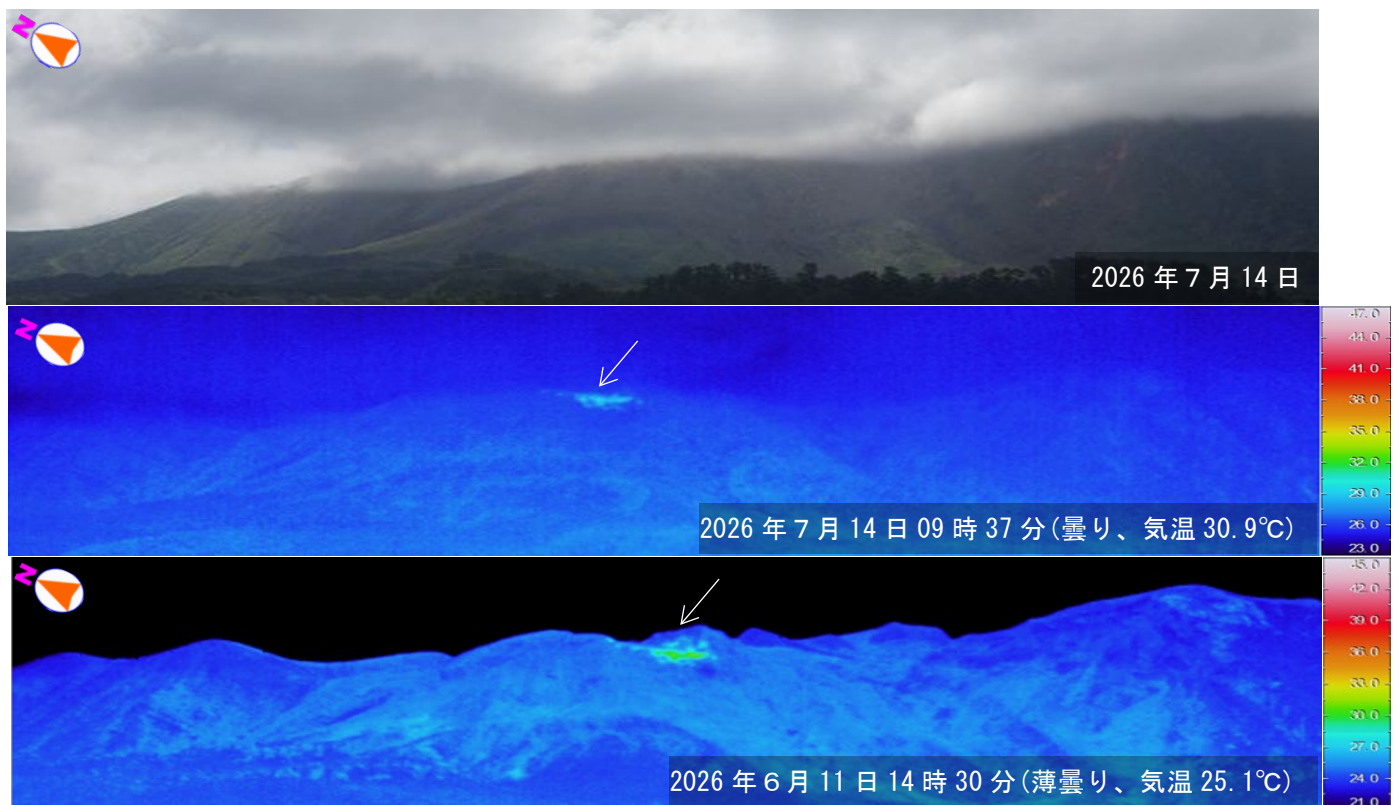


図2-4 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（西側海上から観測）

14日に海上で実施した現地調査では、新岳の山頂付近は雲のため確認できませんでした。新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域（白矢印）を確認しました。

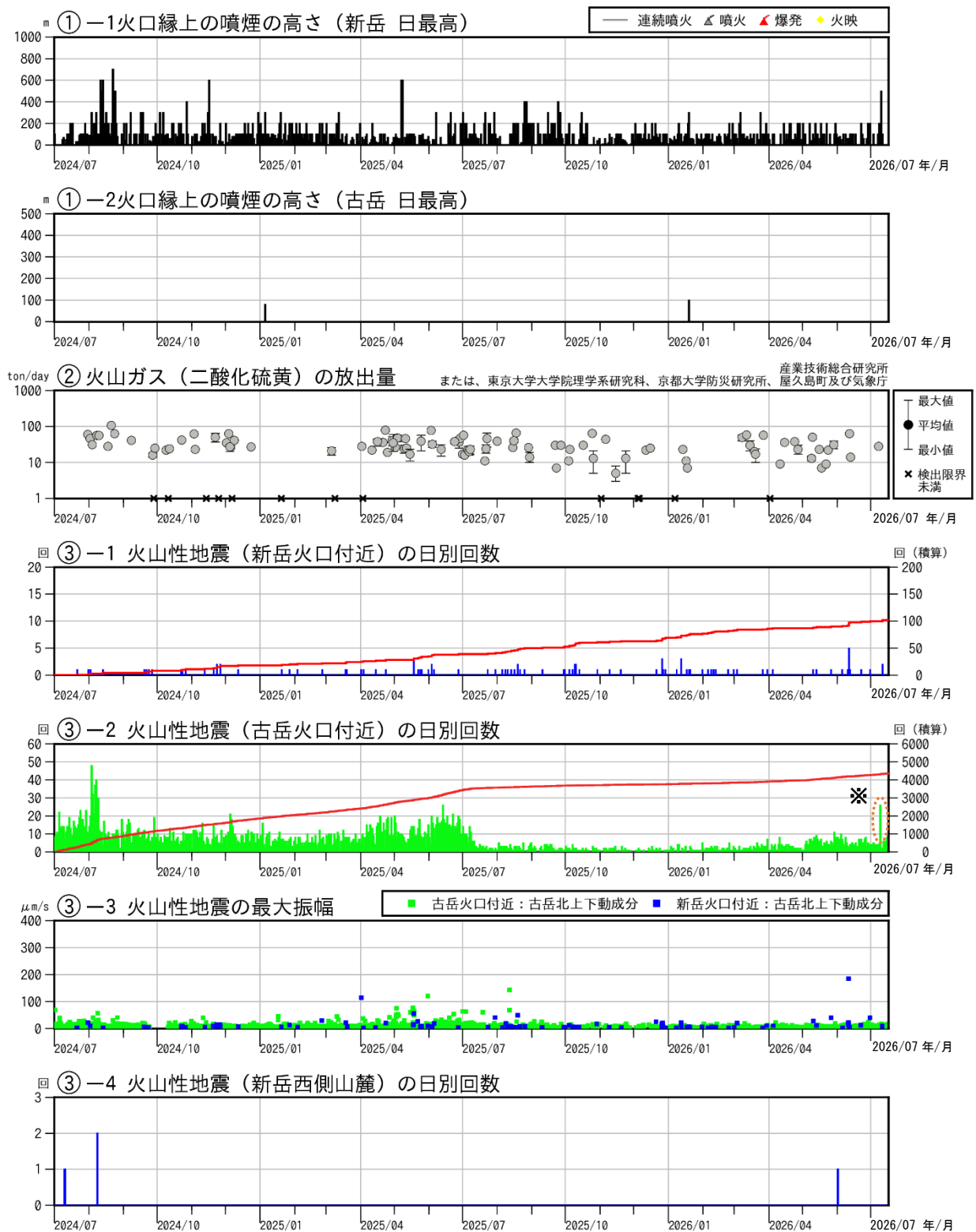


図3 口永良部島 最近の火山活動経過図（2024年7月～2026年7月16日）

- ・ 噴煙の状況に特段の変化は認められません。
- ・ 火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり100トン未満と少ない状態で経過しています。
- ・ 5月頃から、古岳火口付近の浅いところを震源とする火山性地震が増減を繰り返していますが、今回観測された現象の前後で、火山性地震の発生状況には特段の変化は認められません。

※③-2 2026年7月9日の火山性地震（古岳火口付近）の精査の結果、日回数は3回になります（橙破線）。
赤線は火山性地震の回数の積算（右軸）を示します。

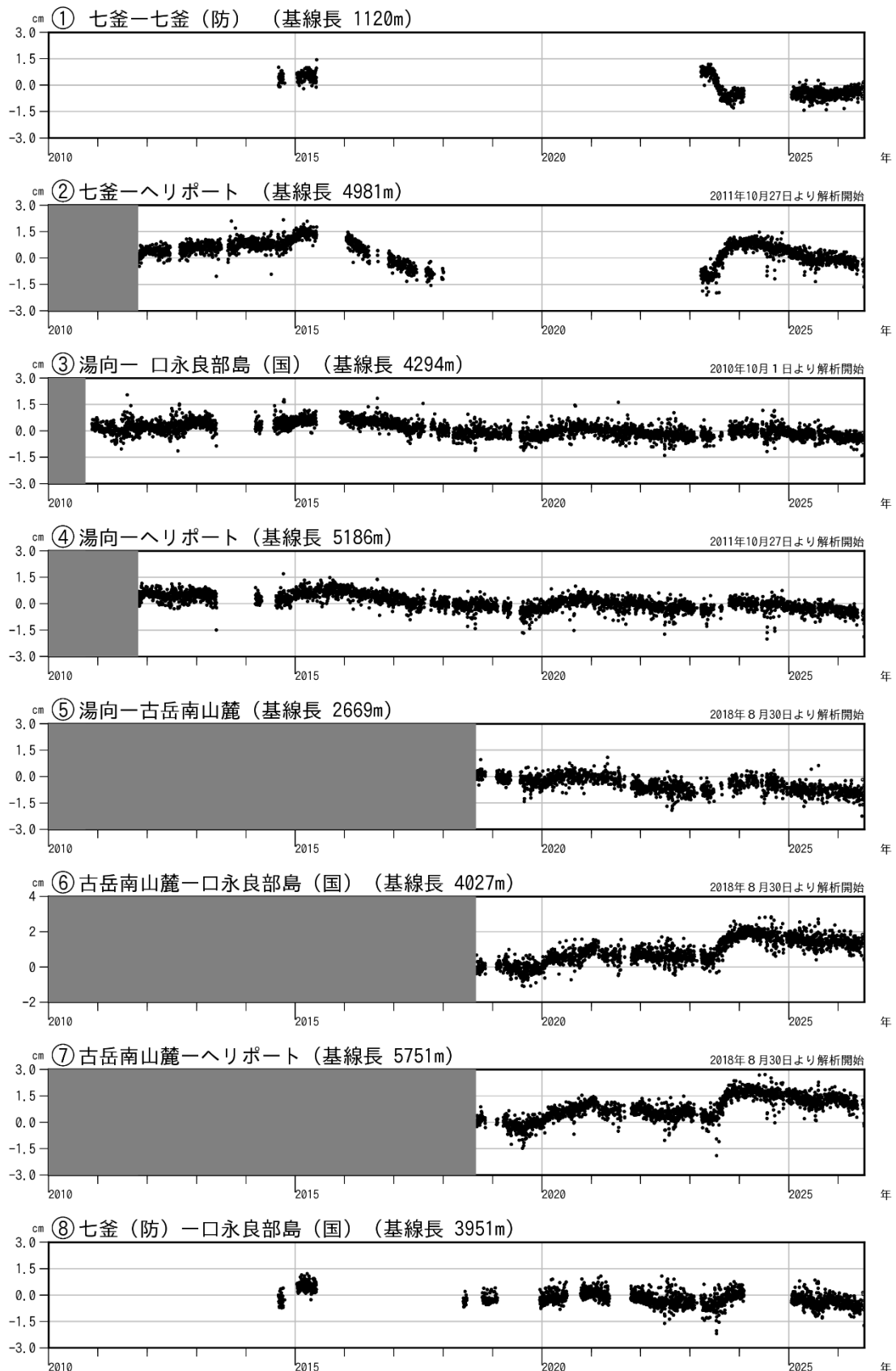


図 4 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010 年 1 月～2026 年 7 月 14 日)

GNSS 連続観測では、2023 年 11 月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

これらの基線は図 5 の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2023 年 3 月 23 日の観測点修繕工事 (七釜観測点) に伴うステップを補正しています。

(国) : 国土地理院、(防) : 防災科学技術研究所

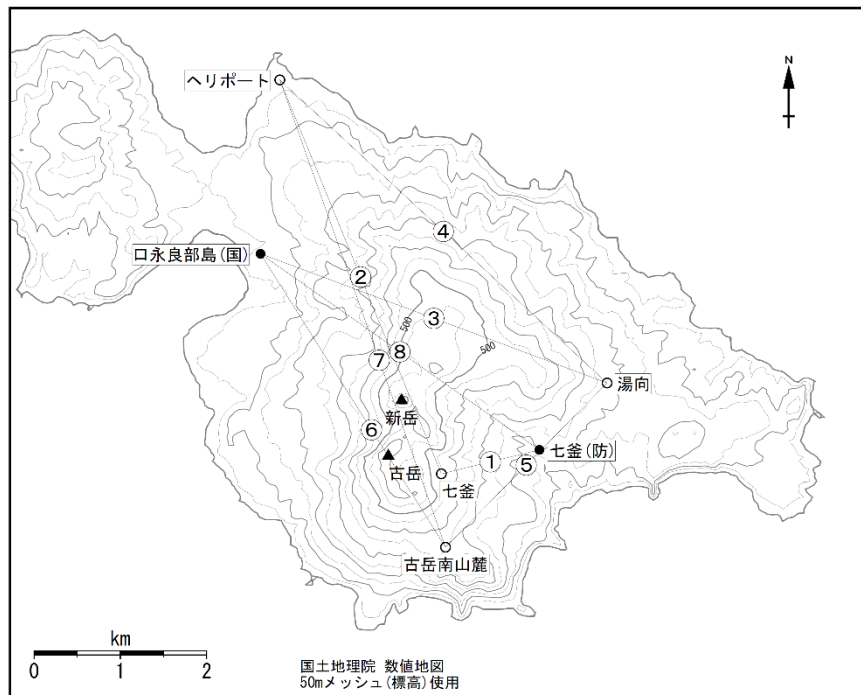


図5 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所

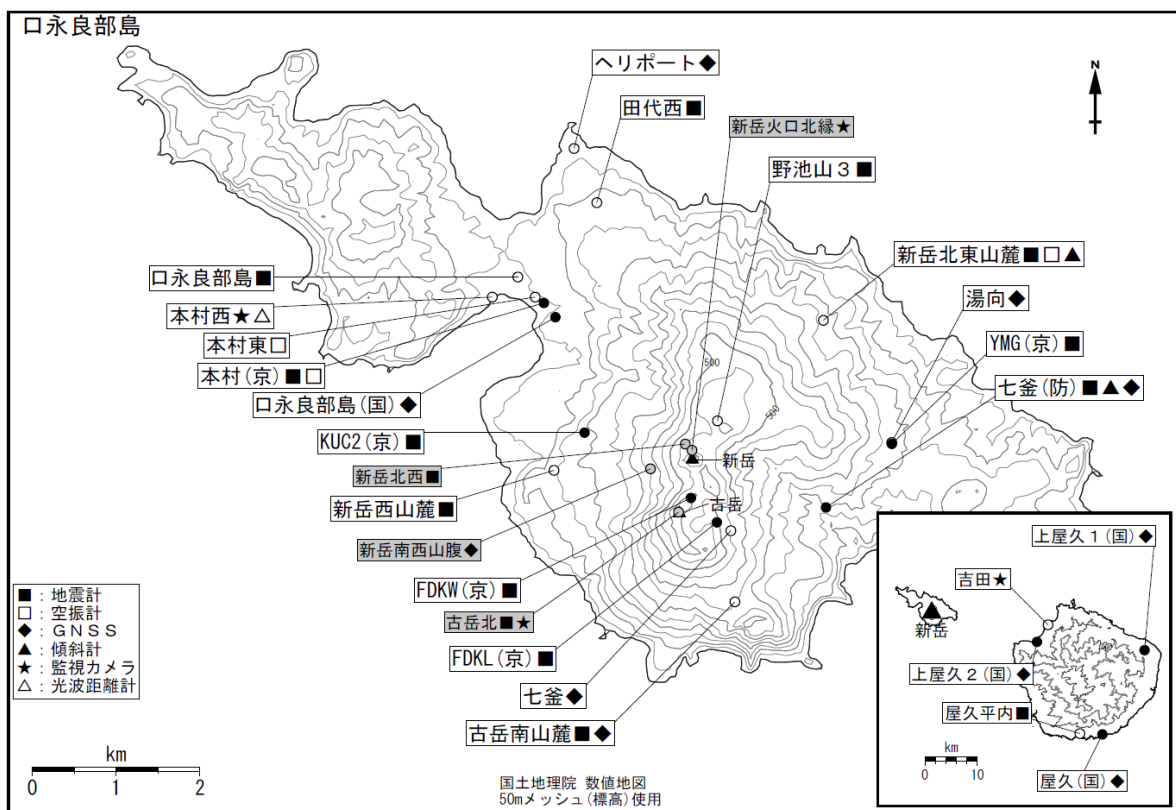


図6 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(京): 京都大学、(防): 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。